知識の科学的様式化*
—「胎教」に関する言説についての分析—

種　田　博　之**

一. はじめに

周知のとおり、知識とは社会的なものであり、当該社会との連関のなかで当該の様式をもって構成される。では、今日、我々の日常生活における知識はどのような様式をもって構成されているのであろうか。本稿は現代社会における知識の構成の一端を、「胎教」という事例によって、つまり、妊娠や出産にまつわるテクストのなかで「胎教」という知識がいかなる様式をもって構成されてきているのかを見ていくことを通して、明らかにしようとする試みである[1)]。

ともすると妊娠や出産は生理的な事柄であることによって、「自然」なことと捉えられがちである。しかし、そうした知識も当該社会と連関して構成され、その「自然」は相対的なものである[2)]。このことは、胎教という知識においても同様であり、もしくはより端的に見ることができる。胎教とは、簡単に言うと、それは胎外から胎内の胎児に対して影響をおよぼすことができるとする知識のことである。詳しくは後述しているが、その知識は、ある時には「俗信」＝「誤った知識」として構成されているのに対して、他の時には「正しい知識」として構成されている。つまり、その知識に対する評価は＜正誤＞という点で対立し、目まぐるしい変容を経験してきているのである。この評価の差異は、胎教という知識が当該社会のなかで全く異なった様式をもって構成されてきているからである。また、そこには当該社会におけるいくつかの要因—他の知識や知識人（もしくはイデオローグ—知識を平易に語る者）などが介在しているようも見える。したがって、本稿の目的は、胎教という知識がとくに戦後以降の日本社会のなかで、どのような様式をもって構成されてきているのかを、当該社会の現実—知識編制、知識人、そして科学技術—との連関を通して考察しよう。このことによって、今日における科学的知識（専門的知識）と日常的知識（常識）との間にある関係について垣間見ることができるだろう。

二. 戦前までの胎教思想の概略

本稿は、胎教という知識がいかなる様式をもって構成されているのかについて、とくに戦後以降に限定して、考察することを目的としている。しかし、胎教という知識は戦後になって突然現れたわけではない。ここでは、戦後以降の様式の様態を知るために、戦前における胎教の様式の様態についてごく簡単に素描しておくことにする。

胎教とは、妊婦の行動が胎児に影響を与えるという発想から、例えば妊婦の精神修養的態度などにより、精神的にも肉体的にも良い子どもが産まれ、お産も軽くなるという考え方である。その歴史はかなり昔まで遡ることができる。例えば、胎教という言葉は古くは前漢時代に編纂された『大戴礼』のなかで、「周の后妃、成王を身に任む。立ちて跂せず、坐して差せず、独り居れども倨せず、怒るといえども詈せず。胎教これをいふなり」という一節のなかで見ることができる[3)]。その『大戴礼』は儒教思想の基である＜礼（道徳）＞のテクストである。また、古代中国の医学は、人間は天地の気の凝集によって生まれるとし、人間の外側にある外界の天地自然が人間の中（胎内）に宿る

*キーワード：胎教、科学的様式（化）、科学技術
**関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程

と考えていた。このことから、引用の一節は道徳（精神修養）的にも医学（科学）的にも「正しい知識」であるということを示しているとともに、「道徳的」および「医学（科学）的」な様式をもって構成されていると言える[4]。こうした胎教観は例で挙げたようなテクストを原典としてテクストクリティクされながら再生産、継承されていく[5]。

このような胎教観は日本でも近世の中期まで主流であったと思われる[6]。その例として稲生恒軒の『いなご草』がある。そのなかには、例えば「人の子、胎内にありては～略～母の心のさまを、子の心にうつし～略～母の心、よこしまなく、すなおなれば、生まるる子の心も正し」といったことが書かれている[7]。稲生は医学と儒学を学んでおり、胎教をそうした学問から見て「正しい知識」として見ていたと言える。換言すれば、この時期も道徳的様式および医学的様式で構成されていたとみなせよう。

近世の中期以降、儒学と医学に新たな動き、すなわち、儒学では古典への回帰を志向する古学派が、そして医学では古学派に影響を受けて古方派が出てくる[8]。その動きのなかで、胎教の様式に徐々に変化が見られるようになる。胎教は医学のテクストのなかでも見いだせるが（医学的様式でも構成されるが）、そこで語られる言説は次第に医学的様式よりも道徳的様式で構成されるようになっていく。後世派においては、胎教の重要性についての指摘や胎教の方法についての説明を見ることはできる。しかしながら、古方派においては異なり、確かに胎教は批判はされていないけれども、それを説明するためにわざわざ一つの章を割くことはしなくなる。あるいは、中期以前においては見られなかった産育にまつわる既存の習俗に対しての批判が見られるようになったり、現在の我々から見ても近代的と思えるような治療の際の技術的なことが中心となって構成されていく[9]。このような道徳的様式への比重の増大は、第二次大戦の敗戦まで、継続していくことになる。それに対して、医学的様式はますます影をひそめることになり、明治期の初期の後世派の医学書に若干見られるだけになる[10]。

このような傾向はさらに強くなり、明治中期から敗戦までの期間は、胎教の医学的様式による構成の比重は減り、道徳的様式での構成がほとんどとなる[11]。この道徳的様式を支えた要因の一つとして、国家による「良妻賢母思想」の推進があるだろう。明治中期以降、富国強兵政策を推進していくための一つの具体的政策として、女子中等教育の制度が整備、確立される。これは女性を「良妻賢母」—「優良児」を生み育て家を守ること—にするためのものであった。そのような状況下で、医学書のなかから胎教についての記述が消えていくのに対して、家政学書や家庭医学書のなかに胎教が載るようになっていく。その典型的なものとして、下田次郎による『胎教』がある。これは医学者の協力も得て医学的にも書かれているが、あくまでも彼の主張の力点は女性を「良妻賢母」にすること、すなわち、「優良児」を生み育て家を守るべき妻や母にすることにある。いわば、このことは胎教を道徳的に様式化しようとしていることを現しているだろう。そのことは医学的には断言しえないと留保しつつも、「胎教は精神の方から妊婦の身体に良好なる影響を与えて、これを胎児にまで及ぼさんとするものである」と述べ、妊婦に精神修養（精神衛生）を課していることから窺うことができる[12]。

戦後に到るまでの期間においては、主として胎教は良妻賢母思想に基づく道徳的様式において構成されていた。しかし、そうした胎教に対して、批判がなかったわけではない。すなわち、医学（科学）の視点から胎教を「俗信（迷信）」とし、批判するようなテクストも見ることができる。

> 物を見て化すといふ思想～略～精神が物質を支配するといふ観念医学の一切を嘲笑し、誰に遠慮もなく否定するだけである。成程文王の母のお話は天下万民の母に望ましい妊婦養生法であり、理想的母性保護の光景である。さういう妊婦養生法によって立派な子供が生まれたなら、これは何も胎教といふ精神力でなく、さういう理想的妊婦養生法が実践出来た彼女の王者的経済の物質力にかかつていたのである。文王の母こそ精神に対する物質の優位を立証した立派なケースといへる。古代の医学者は、かういふ物質力に目をつぶつて一切を胎教という精神感応によつて理論づけたのである（安田徳太郎「胎

教思想の非科学性」『中央公論』一九三五年一二月号　六十五頁)。

これは明らかに胎教を俗信とし、批判する言説である。いわば、こうした胎教に対しての批判的な言説は「俗信的様式」をもって構成されているのである。しかし、こうした様式による言説は終戦以前においてはあくまでも少数意見であったように思われる[13]。

三. 八〇年代までの胎教の様式の様態

上述したように、終戦に到るまでは、胎教は良妻賢母思想に基づく道徳的様式と、科学（医学）的視点で胎教を批判する俗信的様式という二つの様式で構成され、とくに前者の様式が主流をなしていた。しかしながら、戦後、家庭医学書や実用書（ハウ・ツウ本）において良妻賢母思想を介した道徳的様式による胎教は俗信としてみなされ、科学的視点により批判される。すなわち、胎教は俗信的様式をもって現れる。

> 火事を見ると赤アザの子供ができる。〜略〜古くからいろいろと言われていますが、それらは一つとして根拠のないものです（岡田利次郎　三十七頁)。

しかし、胎教そのものが否定されたわけではない。胎教は時間の経過とともに徐々に見直され始める。すなわち、胎教は「先達の知恵」であり、利用できる部分があれば見習えばよいとされるようになる。換言すれば、「温故知新的様式」をもって構成されるようになるのである。

> 時代の流れと共に、胎教も、多少の変遷をへて、一部は行きすぎた方向に利用されたため、今日では非科学性を指摘されるうらみもあるが、胎教の根本思想が、妊婦の精神衛生上、極めて重要であることは、いつの世でも変わりなく〜略〜その良き点は、あらためて認識し、実行する必要がある（山口正義　四十五頁)。

この引用から、とりあえず胎教に対して留保を示しつつも、言い換えれば、いわば俗信として見つつも、利用できる部分を利用しようとしていることが窺えることに留意すべきだろう。つまり、温故知新的様式は俗信的様式を払拭して現れてきているのではなく、古くからの慣習のある部分は非科学的なものであるとする俗信的様式を継承しつつも、ある部分—精神修養を「温故知新」として認めて、胎教を構成しているのである。

ところで、H. セリエの「ストレス」という有名な概念がある。「ストレス」概念が日本に紹介されたのは一九五七年のことであり、その「ストレス」という言葉はその年の流行語になっている。この一九五七年以降、次第に温故知新的様式による胎教の言説は「ストレス」と結びつき、構成されていく。

> 精神的なストレス状態が〜略〜胎児に悪い影響を与えるといえるのです。妊娠中の母体の健康が、胎児の将来に大きな影響をおよぼすのはいうまでもありませんが、このように、精神的な健康もまた無視することができないのです。その点、昔からいわれている“妊娠中の生活を規則正しく、精神の修養につとめれば、生まれる子も形が正しく優秀な子が得られる”というのも一応の理屈と考えてよいでしょう（野平知雄　九十頁)。

つまり、妊婦には心身の衛生が必要であり、胎教の精神修養の見解は利用する価値があるとみなされるようになったのである。戦後、一九八〇年代に到るまでの間において、胎教は一時期俗信的様式で構成されたが、次第に胎教は「先達の知恵」として「正しい知識」であるとされる温故知新的様式をもって構成されていくことになった。そして、その様式はとくに時間を経るに従い、徐々に上記のように「ストレス」という医学的概念と結びつけ合わされて再び「医学（科学）的様式」を帯びていくことになる。

四. 八〇年代以降の胎教の様式の様態

1. 胎教の医学的様式への回帰

八〇年代以降の胎教は、温故知新的様式が「ス

トレス」などの科学（医学）的概念と結びつけ合わされて「医学（科学）的様式化」へと回帰していく流れを引き継ぐことになる。そして、詳しくは次節で見るが、医学的様式による胎教は従来とは異なる内容—方法と成果—をもって現れてくる。方法としては、これまでのような妊婦に「精神修養」を課すようなものではなくなり、「胎児に音楽を聴かせてあげたり」、「読書してあげたり」、「話しかけたりしてあげる」ことが胎教であるとされ、またその成果として「頭のよい子」を産むことができるとされるようになる。まず、八〇年代以降の胎教についての言説が医学的様式をもって構成されていることを示しておこう。そうした言説は実用書や雑誌記事で見いだせる。

胎児にストレスが加わると、脳の健やかな発育が妨げられたり、性格形成にかかわるホルモンの分泌のしくみ（これも脳のなかにあります）が正常に育たなかったりして、ゆがんだ性格になる可能性もでてきます。人間の性格の大半は、胎児のときと、3歳児までの環境によって決まるという学者も多いのです。〜略〜妊婦のストレスが加わりますと、コーチゾンというホルモンの分泌が多くなります。コーチゾンが多くなると、おなかの赤ちゃんに先天異常を起こす危険が高まります。昔からいわれてきた胎教は、この意味で、正しかったのです。妊娠中の夫婦ゲンカは禁物です。胎児がそれを聞いて、ストレスを受けると同時に、お母さん側のストレスの影響も加わって、二重の障害を引起しかねません。すぐにカッとなるようでは、頭のよい子は望めません（野末源一　八十九頁）。

このテクストは一九八二年のものであるが、温故知新的様式と医学的様式の折衷によってなりたっているだろう。母体にストレスが加わることで胎児に悪い影響がおよぼされるとみなし、「精神修養」という表現はないものの、落ちついた気持ちであることが重要であるとし、その意味から胎教を重視している点において、温故知新的様式である。また、随所に医学用語や医学的知見が盛り込まれている点で医学的様式であると言ってもいいだろう。そして、後述しているように、八〇年代以降の傾向である「頭のよい子」という表現も見ることができる点でも重要である。これ以降の言説はこのテクストと同様に、もしくはより強調して現れることになる。いわば胎教は医学的に捉え直されて現れてくるのである[14]。

四ヵ月くらいになると〜略〜胎児は音を音として感じとることができるようになります〜略〜五ヵ月になるとひんぱんに耳にする母親の声を記憶できるようになります〜略〜妊娠中の声の“記憶づくり”は、生まれた後の教育という面からも、大いに役立つことは間違いありません〔大島清（一九八八）　四十五頁〕。

医学の発達が“胎児からの子育て”（胎教）の大切さを立証しました〔大島清（一九九一b）　五十四頁〕。

しかし、こうした医学的様式による胎教の言説は微妙なものを含んでいる。つまり、これら言説は胎教により ＜脳を発育させる＞ ということを述べつつも、そのことが具体的には如何なる意味においてなのか、については明言していないからである。換言すれば、これら言説のイデオローグは、＜脳を発育させる＞ という表現を通して、その表現に対して人々が自明的にいだく理解を活用して、その言説を流布しているように見える。こうした言説の流布の戦術を、間接的に示していることがある。八〇年代以降の胎教に関しての書籍—実用書の特徴として、多くの場合、例えば「医学博士」ないし「医師」のようなその著者の「肩書」があわせてつけられている。これは「肩書」を「権威」として利用していることを示している。ある実用書には「大脳生理学者の権威が教える健脳法」というサブタイトルがつけられていたことからも、こうした「権威」が医学的様式による胎教を正当化するために利用をされていることがわかる[15]。そして、この点にこそ、「学会（界）」における医学的見解の相違を見いだせるのである。例えば、次のような言説がある[16]。

お母さんが妊娠中によい音楽を聴いたりすることが〜略〜知能が高くなるとかいわれ、そのよ

うなことが胎教と考えられがちです。しかし、胎児を教育するという効果があるわけではなく〜略〜正しい発育をさせるためには、お母さん自身が良い環境の中で生活しようとする心がけがたいせつで、好きな音楽を聴いたりしてお母さんが情緒を安定させることが胎児に役立つ、それが胎教なのだと考えてください。つまり胎教とは母親のための教えなのです（『新版　家庭の医学』　千八百六十二頁）。

この言説の意味するところは明白である。つまり、胎教によって＜頭がよくなる＞という言説を人々が受容してきており、そのことに対して著者が医師の立場から批判しているのである。また、以下のような相談が寄せられていることからも人々の受容がわかる[17]。

働いているので、胎教どころではありません。胎教をしないと、赤ちゃんの能力に差がつきますか（『すくすく赤ちゃん』一九九四年五月号　九十頁）。

確かに、このように医学的見解の相違はあるけれども、この相違そのものが逆にまた、胎教が医学的様式をもって構成されてきていることを示している。

2．八〇年代以降の胎教内容—方法と成果—の変化

八〇年代をさかいにして、胎教の方法と成果に変化が生じている。まず、方法の変化を見てみよう。例えば、先に引用した野平知雄の言い方からもわかるように、八〇年代以前において、妊婦の心身の衛生は母体と胎児にとって重要なことであり、その衛生を保つうえで胎教＝精神修養が役立つことが主張されている。換言すれば、胎教はストレス除去の方法として捉えられ、そしてどちらかと言えば、胎児よりも妊婦の心身の衛生—妊婦自身の健康そのものに焦点があてられている。それに対して、八〇年代以降の胎教は胎児を一人の人間として認め、積極的に働きかける—「〇〇してあげる」—方向へと変わっていく。「美しい絵と言葉で綴られた絵本も読んでやりました」という言説はそのことを典型的に表している[18]。つまり、八〇年代以降の胎教は胎児を一人の人間＝主体的存在として扱うようになるのである。

次に成果についてである。八〇年代以前、胎教は＜聖人君子＞を産む方法であるとか、＜優良児＞や＜丈夫なよい赤ちゃん＞を産む方法としてみなされていた。

悪い影響を与えないようにすれば正常な子が生まれ、教育によってどんな人間にもなれる可能性を持っているのだから、悪いストレスを与えないようにするべきである。いいかえれば、それが優良児を生む方法でもあるわけだ（山口正義　四十九頁）。

しかし、近代医学が温故知新的様式で胎教を構成したのは、あくまでもそれが妊婦の心身の衛生を保つ上で、有用であったからである。つまり、胎教により間接的に発育の良い子が産まれうることは認めてはいるが、その直接的成果を認めているわけではない。例えばそのことはすぐ上で引用した著者が次のように書いていることからわかる。

胎児の脳細胞は、組織学的にみても、未熟だから、母親の悪いストレスは伝わりやすいが、良い影響－積極的に物をおぼえこむなどという能力はあり得ない。だから、数学に強い子をつくろうとか〜略〜いった胎児教育という意味での胎教は、ナンセンスというほかない（山口正義　四十九頁）。

それに対して、八〇年代以降の胎教の言説は「優良児」をより特化した方向—「天才児」や「頭のよい子」の方へと、変化している[19]。

私も、元機械工の夫・ジョセフも、IQ一二〇程度です。そんなごく平凡な夫婦の間に生まれた四人の子どもが、みなIQ一六〇以上であるという事実は、遺伝の枠を飛び超え、そこに新しい因果関係、つまり胎児の能力を引き出す「胎内教育」の有効性を明らかにしました。私たちは、子どもが胎内にいるときから、その知育にふさわしい歌や音楽を聴かせるとともに〜略〜

数のかぞえ方〜略〜などについて話しかけ、教えてきたのです。私たちが“子宮対話”と呼んでいるこうした行為によって、実際に四人の子どもたちは、生後二週間で単語を話し〜略〜運動能力の発育をも遂げました（ジツコ・スセディック　四頁）。

このように八〇年代以降の胎教はそれ以前の胎教とは、その様式においても、そしてその内容においても、その特徴を異にしていると言えるだろう。この八〇年代以降の医学的様式による胎教の言説の構成を支える、あるいは構成された言説を支えている要因がある。以下、科学技術の側面に限定して、それが胎教の医学的様式とどのように連関しているのかについて見ていくことにする。

五. 科学技術と胎教の医学的様式との連関

科学技術—医療器具は一九七〇年代以降急激に発展していく。とくに、「画像診断」に関わる器具の発展が著しい。例えば、一九七三年にはエックス線を用いたCTスキャンが開発されているし、妊婦もしくは胎児との関わりで言えば、一九七〇年に超音波エコーを用いてそれをリアルタイムで見る器具（高速電子スキャニング法によるリアルタイム断層法）が開発されている[20]。このような医療器具の一般の病院への普及は八〇年代に入ってからであると思われる。このことを裏づける資料がある。そのような器具についての記述が現れるようになるのは、八〇年代に入ってからである（八〇年代中期以降のテクストには必ずそれらについての記述を見ることができる）[21]。そして、「画像診断」とそれに関わる器具が『現代用語の基礎知識』に掲載されだすのも、八〇年代に入ってからである。例えば、「超音波エコー画像検査」や「画像診断」という言葉が出てくるのは一九八五年版からである。こうした器具が「妊婦」に対しても用いられていることを如実に示していることとして、「超音波エコー画像検査」の項目に、一九八六年版から「妊婦の比較的初期に双胎児の確認にも使用される」という表現が付け加えられていることをあげることができる。

超音波診断が急速に発展したことによって、今までよくわからなかった胎児の〜略〜いろいろなことが明らかになってきました〜略〜超音波診断装置をはじめとする、さまざまな科学技術の発展によって、胎児についての研究が最近大きく進んでいます〔大島清（一九八八）　三頁〕。

お婆さんは「〜略〜超音波にいきましょう」と言って、〜略〜機械を引っ張り出してきた。先程から私はこの人を〜略〜お婆さんよばわりしているが、このお婆さんだって立派な先生なのである。だから超音波などというスペシウム光線に似たイメージをもつ名称の機械も、やすやすと操ることができるのだ。〜略〜私の腹部にはベトベトの粘液が塗られ、コンピューターのマウスのような物体がゴロゴロと転がり始めた。〜略〜モニター部分に何かが映し出されていた。お婆さんはモニターの中央部を指さし、「〜略〜このピクピク動いているのわかる？これが赤ちゃんの心臓ですよ。元気ですね」と言ったので、私は「〜略〜動いている」と感動の叫びを抑えめに発した（さくらももこ　二十六頁）[22]。

この医療器具、とくに＜超音波診断装置＞の発展・普及と胎教の医学的様式化—＜頭をよくする方法＞への特化とは連関しているように思われる。これまでの引用からもわかるように、八〇年代以降のテクストは「画像診断」をもとにして構成されている。その「画像」を通して、例えば胎児に音楽を聴かせたりする時の反応を容易に見ることができるようになる。そして、そこで「医学博士」といった「肩書」＝「権威」をもつイデオローグ—専門的知識を平易に語る者—が、胎児は急激に身体の様々な器官を発達させており、胎教は重要性を持つという医学的様式での言説を語れば、胎教＝＜頭をよくする方法＞ということに対しての信憑性が生じても不思議ではない。しかし、このことは医療器具が胎教の医学的様式への変容の主たる要因であると主張するものではない。どちらかと言えば、医療器具は胎教のそうした変容の「きっかけ要因」もしくは「強化要因」として作用しているように見える。この問題につ

いてはもう少し広い視点で見る必要がある。

六. むすび—残された課題—

これまでの考察を通して、胎教がいかに医学、より一般的に言えば科学の文脈のなかで構成されてきているのかについて明らかにした。しかし、こうした医学的様式化、もしくは科学的様式化は、胎教だけに限定されるものではないように思われる。日常の生活のなかで、かなり多くのことが科学的に語られている。例えば、テレビのコマーシャルで「タウリン」などの科学的な専門用語が何気なく使用されていることからも、このことがわかる。いわば知識の科学的様式化は今日の日本社会の一つの傾向であるだろう[23)]。だが知識の科学的様式化は、胎教の例でもわかるように、必ずしも当該知識が科学的知識となることを意味しているわけではないことに留意すべきである。科学的様式化とは、知識の一部もしくは全体に科学的な専門用語が配列されることで科学的知識かのように見せたり、あるいはそのことによって科学的知識からの逸脱の可能性を秘めたものであると言える。換言すれば、それは「科学的装飾」もしくは「科学的偽装」でもあるのである。

ここに今後の課題があるだろう。それは、科学的様式による知識構成の要因の問題であり、そうした知識の人々の受容の問題である。これらの問題について充分な考察を加えることはできないので、残された課題として若干の示唆を示しておく。前者について、とくに科学技術との連関については上で考察した通りである。しかし、科学技術という要因は科学的様式化へと向かわしめる転轍手であるというよりも、科学的様式化へのきっかけか、ないしその傾向を強化するものであるだろう。すなわち、科学的様式化へと方向づけたあるいは方向づけている主たる要因を明らかにする必要がある。このことは日本社会での科学的知識の制度化ないし権威化の問題である。後者は前者と連関する。科学的知識が正当化され権威を持つことによって、日常的知識（常識）を含む他の知識も科学的様式化せざるをえなくなってきているように思われる。例えば、公害などの社会問題を告発するにも、そのことを示す科学的資料がなくてはならないように（もちろん、その資料は科学的方法で集められなくてはならない）。このことは、今日、日常的知識が科学的様式化していることを、あるいは科学的知識が日常的知識に対して優位にあることを、示しているように見える。つまり、日常生活のなかで科学は欠くことのならないものとしてあるのである。このことを単純に捉えるとすれば、ハバーマス的に、我々の生活世界が科学的知識を尖兵とした道具的合理性に植民地化されているということになるのかもしれない。だが、人々は一方的に科学的知識を受容させられているわけではなく、ここには別の契機が働いているようにも思われる。すなわち、ここには人々における科学的様式化に対しての利害関心があり、そうした人々の利害関心—「平民的動機（M.ヴェーバー）」—に顕在的もしくは潜在的に奉仕する知識人（イデオローグ）の存在があるのではないだろうか。これらをふまえて、知識を科学的様式化へと向かわししめている転轍手について見ていかなくてはならない。

[注]

1）本稿の資料はJAPAN/MARCの「胎教」項目で検索したテクストである。それらについては資料を参照（山村正夫の『怪奇標本室』と『ミステリー同好会殺人事件』は本研究とは関係ないので除外した）。テクストの著者の社会的属性として、医学博士（もしくは医師）12人、医学以外の学者2人、宗教家3人、その他—主婦・教員・ジャーナリストなど10人である。JAPAN/MARCによる検索結果は、全てを網羅できているわけではない。したがって、補足的に26冊のテクストを資料として用いている。資料選択には恣意性が含まれうるので限定的に捉える必要があるが、JAPAN/MARCでのテクスト（および後述の『大宅一文庫雑誌記事事件目録』の雑誌記事）とほぼ同じ傾向を読み取ることができており、この点から代表性は確保していると思われる。本稿においては留意しなかったが、これらのテクストは類似する表現が用いられており相互に影響を与えあっていると思われる。門外漢が書いたテクストのなかにもあまり独自の見解を見ることはできない。また、『大宅壮一文庫雑誌記事事件目録』（一九八八年まで）の大項目「おんな」・中項目「出産」・小項目「妊娠・出産」に限定して、胎教にまつわる記事を検索すると、その件数は総数743件中20件ある（「胎教」という言葉が使用されているも

のだけでなく、「胎内教育」・「よい赤ちゃんをうむ」・「頭の良い子を産む」といった表現が使用されているものも拾い出した)。それらを列挙すると表1になる。

また、一九八〇年代後半から「胎教」だけではなく、「妊婦」に対しての関心が沸き起こってきている。そのことを示していることとして、一九八八年の新語として「プレ・ママ」や妊婦向けの雑誌〔『ピーアンド』(小学館　一九八五年刊行)、『マタニティ』(婦人生活社　一九八五年刊行)、『バルーン』(主婦の友社　一九八六年刊行)、『たまごクラブ』(福武書店　一九九三年刊行)〕などの刊行を見ることができる。妊婦向けの雑誌は各々毎月二十万部売れている。子育てや妊婦を取り扱う漫画雑誌〔例『ヤンママ』(笠倉出版社　一九九三年刊行)など〕の刊行も見ることができる。

2) 例えば出産の形態を見れば、かつては産婆による出産が「自然」なことであったが、今日あまり見ることができない(落合恵美子や藤田真一を参照)。

3) 新田大作　八十頁。

4) 本稿では医学と科学とを区別していない。また、医学と科学とは近代医学や近代科学だけを意味しているのではなく、当該社会においてそのように認められているものを指す。

5) 典型的な例としては新儒学の朱子によるテクストがそうである。

6) 新村拓を参照。なお、新村は出産や生殖観に対する仏教思想の影響も指摘している。

7) 山住正己他編注　二百二十二頁。

8) 形而上学化した儒学と医学に対しての批判として古学派や古方派が現れる。医学においてはこれ以降、蘭学の影響もあり、とくに古方派は実証的な方法へと展開していった。なお、従来の方法を踏襲する流派は後世派(室町時代後期に中国から伝来した医学的知識を基礎とする)と呼ばれる。

9) バーンズ, S. を参照。

10) 緒方正清を参照。補足的に言えば、明治になり明治政府はドイツ医学による医学教育体制を整備していく。そして、医師免許も国家認定となり、伝統的な漢方医学、とくに後世派は正統性を失い、医学史から消えていく。

11) 新村拓を参照。

表1

発行日	雑誌名	記事みだし
1926/ 5	主婦の友	優良児を産む為の胎教　真の意味の胎教は結婚生活と共に始まる
'35/12	中央公論	胎教思想の非科学性
'61/ 5	婦人公論	頭のよい子を産む方法
'63/ 3	暮らしの設計	初めての妊娠とお産　丈夫なよい子を産む方法
'67/ 6 / 1	週刊現代	都会人の精子では優秀児は生めないショック！必要になった父親の"受胎前準備"
'72/ 9 /23	微笑	ヤング・アダルトの完全なる結婚講座　出産の不安　あなたは丈夫な赤チャンが生めるか？
'75/ 2 /18	週刊女性	異色シリーズ・秘伝公開⑲夫婦げんかすると未熟児が生まれる!?現代の胎教とは？
'75/ 7 /10	女性自身	20代のお話し　夫婦の年齢差10、優良児を生む確率はこれがいちばん
'75/12	婦人公論	母になる人へ胎児の頭の栄養学　産んでからは遅すぎる！
'77/ 4 /15	週刊朝日	パパ・ママ必読頭のよい子を産み育てる秘訣はこれだ！
'78/ 8 /26	微笑	ママとこれからママになるあなたにやれば確実な効果！胎教の新知識
'79/11/1	週刊平凡	PLAY&LIVING　胎教の歌で丈夫な子を
'81/ 1 /2・9 合併号	週刊朝日	実践健康学お産のあとさき⑥丈夫な子を生むための食習慣
'82/ 6 /19	週刊現代	サイエンス now 胎児の脳に悪影響を与える母親の飲酒
'87/ 2 / 7	微笑	素敵なママ学①賢い子がほしいなら妊娠中に子宮対話を！
'87/ 2 / 7	微笑	素敵なママ学⑥頭のいい子を産む妊娠術
'87/ 8	LEE	もう胎教には、ふりまわされない！
'87/11	婦人倶楽部	特集「胎内教育」で天才児が育つ
'87/11/12	NEWS WEEEK 日本版	TRENDS　おなかの子どもは聞いている　より賢い子どもが生まれますようにと胎児教育講座に飛びつく母親たち
'87/12	主婦と生活	こんな天才児が産める！　いま話題騒然のステディック式『胎内教育』のすべて

12) 下田次郎　八十四頁。ちなみに初版は一九一三年、増訂版は一九一六年、筆者が資料として用いたのは増訂七十版、一九三〇年のものである。下田次郎は女子中等教育制度の確立に尽力を注いだ人物であり、「良妻賢母思想」のイデオローグ的な存在であった。

13) 表1参照。これらの資料を見る限り、戦前の胎教の俗信的様式による構成は例外的なものであると言える。また、下田とは違って胎教が医学的に立証されたということをかなり強調する道徳的様式による言説もある（表1：『主婦の友』一九二六年五月号）。

14) 医学的様式による言説の構造は温故知新的様式のそれと基本的に同じである。すなわち、胎教のある部分については非科学的であると批判するが、利用できる部分を、もしくは医学的知見と関連している部分を、医学的に語る形態をとるのである。

15) 大島清（一九九一b）参照。医学博士などの「肩書」がない場合には、別の「肩書」が利用される。例えば、ソニーの名誉会長である井深大の場合、その著作に「ソニー名誉会長」であることが明記されている。またより本質的な問題がある。それは、専門的知識（科学的知識）ないしその所有者＝専門家が、＜なぜ＞そして＜どのように＞「権威」を持ちうるのかということである。この問題については別稿で考察する予定である。このことを考えるうえでWallis, R. (ed.)、Barnes, B.、Rose, N. らの文献は示唆にとむ。

16) 総じて言えば、家庭用の医学事典のたぐいのテクストは本文中で引用した『新版　家庭の医学』と同様の見解かもしくは、胎教についての記事そのものを掲載していない。

17) 言説のレベルだけではなく、意識のレベルにおいても胎教に対しての関心が窺える。例えば、公文教育研究会が一九九一年に行った「『胎教』に関する意識と実態調査」によれば、胎教に対して興味や関心がある人は約七割近くに達し、実際に胎教を行ったことのある人も四割におよんでいた。また、その調査において胎教を明確に定義づけているわけではないが、その他の質問の結果からみて、胎教は胎児に対して直接的に影響をおよぼす行為として捉えられていることが窺え、その点に留意すべきであると思われる。

18) ジツコ・スセディック　七十六頁。

19) 「胎教」という言葉を使用しないで、＜頭をよくする＞ということが述べられている言説もある。例えば、一九六一年五月号の『婦人公論』には「頭のよい子を産む方法」という記事が掲載されている（表1参照）。そのなかでは、ビタミン投与群の赤ん坊（胎児）の四年後の平均知能指数は非投与群の赤ん坊のそれと比べて高かったと述べ、妊娠中にとくにビタミンB1を摂取することを勧めている。

20) 医療器具の歴史については坂口志朗を参照。

21) 本稿が資料として用いている八〇年代以前のテクストには、「超音波診断」に関する記述はなかった。JAPAN/MARCを用いて検索項目を広げる調べると（胎教 or 妊娠 or 出産）、妊婦向けの実用書というよりも専門書と思われるが、例えば『超音波と妊娠』（鈴木雅洲他編　診断と治療社　一九七四）というテクストがある。

22) この言説はもう一つ別のことを示してくれている。「だから超音波などというスペシウム光線に似たイメージをもつ名称の機械も、やすやすと操ることができるのだ」という表現から、科学的知識（道具）に対しての人々（民衆）の意識—医者であるから難しそうな機械も簡単に操ることができるという人々の意識が窺えるように思われる。

23) 必ずしも、今日の知識の様式が科学的様式だけであると主張するつもりはない。他にもエコロジー的なものやオカルト的なものなどのいくつかのヴァリエーションはありうるだろう。しかし、今日の日本社会において科学的様式は主流であるように思われる。

胎教関係書籍資料（JAPAN/MARCを用いての検索結果）

荒木勤他監修『おなかの赤ちゃんがよろこぶはつらつマタニティ』丸善メイツ　一九九二
伊藤真愚『胎教』柏樹社　一九八九
井上日宏『胎教』徳間書店　一九七三
井深大『井深大の胎児は天才だ』チクマ秀版社　一九九二
岩田正晴監修『おなかの赤ちゃん胎教10ヵ月』成美堂出版　一九九四
大島清監修『胎教百科』主婦の友社　一九九〇a
大島清『胎教コンサート』主婦の友社　一九九〇b
大島清他『お母さんになる日』佼成出版社　一九九一a
大島清『赤ちゃんの頭をよくする胎教と〇歳児教育』二見書房　一九九一b
笠井千晶編『胎児だって勉強したい』朝日ソノラマ　一九九四
加藤初夫『すてきな胎話』サンマーク出版　一九九一
木田文夫『優生と胎教』実業之日本社　一九五〇
関本昭一『胎教・赤ちゃんは天才です』潮文社　一九八九
園頭広周『恋愛・結婚・胎教・育児』正法出版社　一九九一
谷口祐司『胎教とその修正』育児文化研究所出版　一九九〇
七田真『驚異の胎教』日本経済通信社　一九九三
バーニー，T.『すてきな赤ちゃんの胎内育児法』祥伝社

一九九〇
フォン・ラフラー＝エンゲル、W.『胎児は学ぶ』大修館書店　一九九三
山口正義『新しい胎教』徳間書店　一九六六
山本貴美子『胎児を念じて理想の子を出産』飛驒福来心理学研究所　一九九三
山本容史和『幸せの泉』胎教会　一九七五
山本容史和『いのちの育つとき』胎教会　一九八二
山本容史和『バクのひとり言』バクの会　一九八八
山本容史和『バクのひとり言』胎教会　一九八九
山本容史和『バクのひとり言』バクの会　一九九二
山本容史和『女性の神秘』バクの会　一九九三
森本義晴『胎教』エピック　一九九三
森本義晴『おなかの赤ちゃんとおしゃべりしていますか』ごま書房　一九九四
リック・ニシオ『あかちゃんおげんきですか』PHP研究所　一九九六

補足資料

雨森良彦『安産のための48章』主婦の友社　一九八〇
石坂啓『赤ちゃんが来た』朝日新聞社　一九九三
石野信安監修『胎教ですてきに過ごす10ヵ月』金園社　一九九三
稲葉美佐子編『はじめての赤ちゃん』光文社　一九六三
井深大『子どもは育て方しだい』ごま書房　一九九五
大島清『胎児からの子育て』築地書館　一九八三
大島清『胎児教育』ごま書房　一九八八
大島清監修『のびのび胎教BOOK』永岡書店　一九八九
大島清監修『新編　胎教百科』主婦の友社　一九九五
岡田利次郎監修『正しい知識と心得　妊娠から安産育児まで』元文社　一九六一
小林太刀夫監修『新版　家庭の医学（第11次改訂版）』時事通信社　一九九六
さくらももこ『そういうふうにできている』新潮社　一九九五
ジッコ・スセディック『胎児はみんな天才だ』祥伝社　一九八六
下澤瑞世『新胎教』主婦の友社　一九二五
下田次郎『胎教（増補改版　七十版）』実業之日本社　一九三〇
バーニー，T.『胎児は見ている』祥伝社　一九八二
野末源一『頭のいい赤ちゃんができる本』二見書房　一九八二
野平知雄『よくわかる妊娠と安産のすべて』有紀書房　一九六八
林田健男他編『家庭医学大全科』社会保険法規研究会　一九七八
松村功雄『優良児誕生』建帛社　一九六六
ルディングトン，S. 他『驚くべき秀才づくり赤ちゃん育児の秘密』青春出版社　一九八八
柳田芳邦『妊娠・胎教と安産の心得』東栄堂　一九六八
『大宅壮一文庫雑誌記事事件目録』㈶大宅壮一文庫
『家庭医学事典』新星出版社　一九九五
『新版　家庭の医学』保健同人社　一九九三
『すくすく赤ちゃん』一九九四年五月号　日本放送出版協会
『妊娠と出産の百科』保健同人社　一九六七

参考文献

ヴェーバー，M.『宗教社会学論選』（大塚久雄他訳）みすず書房　一九七二
Wallis, R. (ed.), *On the Margin of Science*, London : Routledge & Kegan Paul, 1979.
緒方正清『日本産科学史』科学書院　一九一八
落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房　一九八九
坂口志朗「医療のハイテク化」『〔通史〕日本の科学技術　第四巻』中山茂他編　学陽書房　一九九五
新村拓『出産と生殖観の歴史』法政大学出版局　一九九六
新田大作『大戴礼』明徳出版社　一九七二
ハーバーマス，J.『イデオロギーとしての技術と科学』（長谷川宏訳）紀伊國屋書店一九七〇
バーンズ，S.「権力・知・再生する身体」『みすず』368　みすず書店　一九九一
Barnes, B., *About Science*, Oxford : Basil Blackwell, 1985.
藤田真一『お産革命』朝日新聞社　一九七九
山住正己他編注『子育ての書　1　』平凡社　一九七六
Rose, N., *Governing the Soul*, London : Routledge, 1989.

Transformation into the scientific mode of knowledge
—An analysis of discourses on 'maternal impression *(Taikyo)*'—

ABSTRACT

The knowledge, having the set of mode in the society concerned, has been socially constructed. If so, what sort of mode is the knowledge constructed in the present Japanese society? This paper inquires the present mode of knowledge in terms of analyzing the transformation of the mode of knowledge called 'maternal impression *(Taikyo)*'. Namely, analyzing the transformation of maternal impression, we can clarify its modes of knowledge have been constructed in the society in question. The modes are '*folk observance (superstition)*', '*science*', and '*revival* (past knowledges are reinterpreted and given new meanings)'. And we can make clear that the mode of knowledge tends to consisting of 'scientific mode' in the present Japanese society, Too, we analyze social conditions, especially scientific technology and intelligentsia (or ideologue) on which the scientific mode is constructed.

Key Words : maternal impression *(Taikyo)*, scientific mode, scientific technology